

## (2) 企画展

### 「歿後30年 草野心平展 ケルルン クックの詩人、富士をうたう。」

期 間 平成30年9月22日（土）～11月25日（日） 56日間

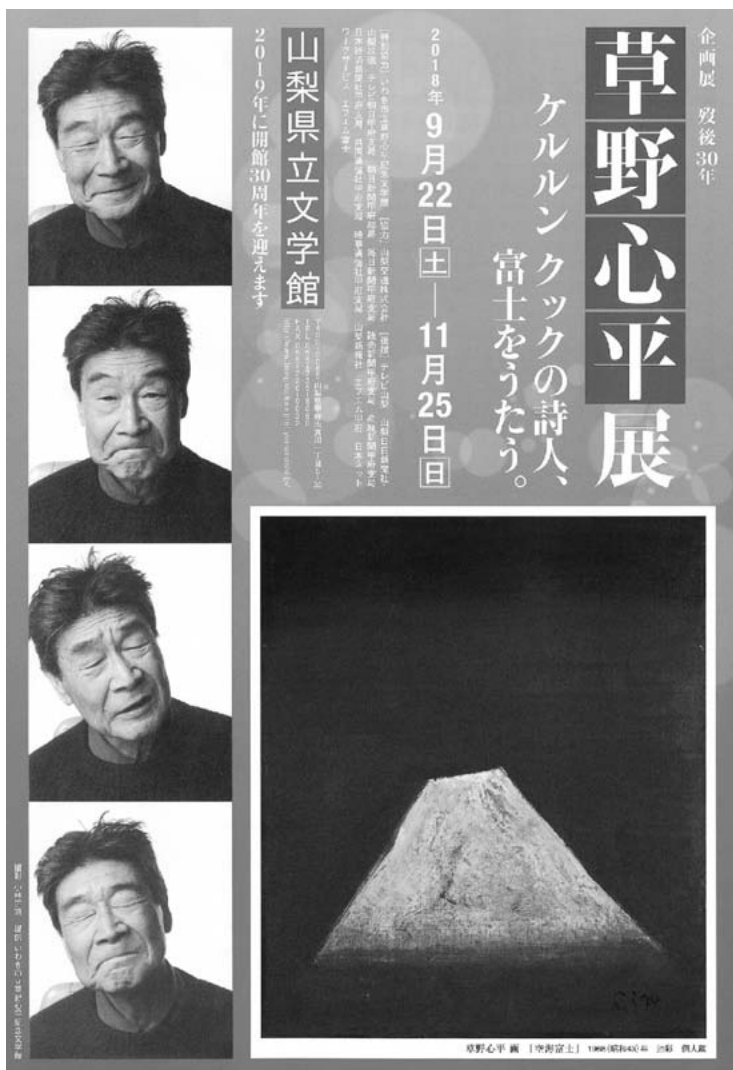
趣 旨 独自の表現で詩の世界を切り開いた草野心平（1903～1988）は、福島県石城郡上小川村（現・いわき市小川町）に生まれた。中国・嶺南大学（現・中山大學）留学の頃より本格的に詩作を始め、詩誌「銅鑼」を創刊、高村光太郎や宮沢賢治らと交友を結んだ。1928（昭和3）年11月に蛙の詩を集めた活版第一詩集『第百階級』（銅鑼社）を刊行し、以来起伏に富んだ人生の中で個性的な詩を多く生み出した。現在では、多くの小学校教科書に詩「春のうた」が採用され、蛙の鳴き声を表した「ケルルン クック」のフレーズは幅広い世代に親しまれている。

心平を魅了し、創作の重要なテーマの一つとなったのが富士山である。心平は、富士山を「一つの美と存在の象徴」として捉え、「存在を超えた無限なもの」「存在に還る無限なもの」とも感じていたという（「富士山」〈「現代詩人の自作自解」〉）。その富士山を数々の詩にうたい、書や絵画でも富士の魅力ダイナミックに表現した。

本展では、自身の誕生日記念の富士山来訪のエピソードや、山梨県立甲府南高等学校の校歌作詞など、山梨との関わりについてふれながら、原稿、書、絵画など約250点の資料を通じて、草野心平の生涯と生命力溢れる詩の世界を紹介する。

編集委員 阿毛久芳（都留文科大学名誉教授） 蜂飼耳（詩人・作家）

- 展示構成
- I 誕生・少年時代
  - II 生き抜く詩人 日本と中国
  - III 躍動する詩の世界
  - IV 富士をうたい、富士を愛す



### (3) 特 設 展

#### ① 特設展「生誕120年 井伏鱒二展 旅好き 釣り好き 温泉好き」

期 間 平成30年4月28日（土）～6月17日（日） 45日間

趣 旨 昭和期の日本文学を代表する作家であり、「山椒魚」「ジョン万次郎漂流記」「黒い雨」などの名作を残した井伏鱒二（1898～1993 広島県生まれ）。生誕120年を記念して、井伏が山梨各地に残した足跡を中心に紹介する。

井伏は、東京府井荻村（現杉並区清水）に居を構えた1927（昭和2）年以後、小説の取材や趣味の川釣りのためしばしば山梨を訪れている。1938年には、太宰治を御坂峠の天下茶屋に誘い、結婚に至るまでの世話をし、1944年に甲府に疎開した折にも、その後疎開をしてきた太宰と交流を持った。また、飯田蛇笏・龍太親子とも長きにわたり交流をもち、特に龍太とは40年近くにわたり多くの書簡を交わしている。さらに「侘助」「七つの街道」「小黑坂の猪」「岳麓点描」など、山梨を舞台にした作品を数多く執筆した。

本展では、下部温泉、増富ラジウム温泉、疎開した甲府など、井伏が訪れ作品の舞台となった地や、飯田蛇笏・龍太親子との交流を、当館所蔵の原稿、書簡、書画などの資料を中心にたどっていく。志賀直哉の井伏鱒二宛葉書や、今回初公開の井伏の手書きによる富士川河口周辺の絵地図なども出品する。

#### 展 示 資 料 一 覧

\*は個人蔵 無印は当館蔵または寄託資料

会期中、一部資料の入れ替えを行います。前期 4/28（土）～5/23（水） 後期 5/24（木）～6/17（日）

#### 書画の世界

井伏鱒二「はなにあらしのたとへもあるぞ さよならだけが人生だ」軸装

井伏鱒二「はるのねぎめのうつゝできけばとりのなくねでめがさめました」軸装

井伏鱒二「私は樹木が好きである特に竹柏樟白楨棗の木などに愛着を持つてゐる」軸装

井伏鱒二「今宵は仲秋明月初恋を偲ぶ夜 われら万障くりあはせよしの屋でひとり酒をのむ」軸装

井伏鱒二「あきのおんたけこのつどきに ひとりのぼればはてなきおもひ」軸装

井伏鱒二「地に沿うて飛ぶみそさゞいを見る」軸装 \*

井伏鱒二・奥山麿「送状 水門町八大酔我等大酔 奥さん叱る勿れ」額装

井伏鱒二 峯の雪が裂け雪がなだれる そのなだれに熊がのつてゐる あぐらをかき安閑と蓆をすふ やうな恰好でそこに一ぴき熊がゐる なだれと題す 鱒二 \*

井伏鱒二 絵付け皿

井伏鱒二製作 柳の木筆立て 飯田龍太旧蔵 \*

井伏鱒二「生簀から鯉とれば鯉に時雨けり」「明るい月夜です岡にのぼれば万朶の桜です」枕屏風 \* 前期

飯田蛇笏・井伏鱒二・高室呉龍 ほか 貼り交ぜ枕屏風 \* 後期

#### 作品の世界1

「世紀」創刊号 1923（大正12）年7月

井伏鱒二『集金旅行』1937（昭和12）年4月 版画荘

井伏鱒二『丹下氏邸』1940（昭和15）年2月 新潮社

井伏鱒二「噸生菩提」原稿

井伏鱒二『噸生菩提』1935（昭和10）年1月 竹村書房

#### 作品の世界2

井伏鱒二『ジョン万次郎漂流記』1937（昭和12）年11月 河出書房

井伏鱒二『さざなみ軍記』1938（昭和13）年4月 河出書房

志賀直哉 井伏鱒二宛葉書 年不明10月27日

井伏鱒二随筆全集第3巻『風貌姿勢』1942（昭和17）年2月 春陽堂書店

井伏鱒二『厄除け詩集』1937（昭和12）年5月 野田書房

井伏鱒二『厄除け詩集』1952（昭和27）年1月 木馬社  
井伏鱒二『厄よけ詩集』1961（昭和36）年3月 国文社  
井伏鱒二『厄除け詩集』1977（昭和52）年7月 筑摩書房  
井伏鱒二『厄除け詩集』1990（平成2）年1月 牧羊社

### 作品の世界3

井伏鱒二『侘助』1946（昭和21）年12月 鎌倉文庫  
井伏鱒二『試験監督』1949（昭和24）年9月 文藝春秋新社 \*  
井伏鱒二『遙拝隊長』1951（昭和26）年4月 改造社  
井伏鱒二『漂民字三郎』1956（昭和31）年4月 大日本雄弁会講談社  
井伏鱒二「本日休診」原稿  
井伏鱒二『本日休診』1950（昭和25）年6月 文藝春秋新社  
井伏鱒二『取材旅行』1961（昭和36）9月 新潮社

### 作品の世界4

井伏鱒二『黒い雨』1966（昭和41）年10月 新潮社  
映画「黒い雨」パンフレット 1989（平成元）年 東映  
飯田龍太 井伏鱒二宛書簡 1966（昭和41）年9月27日  
井伏鱒二 飯田龍太宛書簡 1967（昭和42）年2月15日 \*  
井伏鱒二「青柳瑞穂と骨董」原稿  
井伏鱒二『早稲田の森』1971（昭和46）年9月 新潮社  
井伏鱒二『荻窪風土記』1982（昭和57）年11月 新潮社  
井伏鱒二『鞆ノ津茶会記』1986（昭和61）年3月 福武書店

### 増富温泉

井伏鱒二「釣宿」原稿  
「新潮」1970（昭和45）年4月  
井伏鱒二 飯田龍太宛葉書 1959（昭和34）年2月11日 \*  
飯田龍太 井伏鱒二宛書簡 1970（昭和45）年5月13日

### 御坂峠

写真 太宰治の御坂峠文学碑を見に行く井伏 1953（昭和28）年10月  
写真 太宰治の御坂峠文学碑除幕式の日 1953（昭和28）年10月31日  
太宰治 御坂峠文学碑拓本 軸装  
井伏鱒二「太宰君」原稿  
太宰治 井伏節代宛葉書 1936（昭和11）年12月8日消印  
井伏鱒二 画 太宰治 筆「高田英之助像」色紙  
太宰治 井伏鱒二宛葉書 1938（昭和13）年9月30日消印 前期  
太宰治 井伏鱒二宛書簡 1938（昭和13）年10月25日  
井伏鱒二『螢合戦』（新選随筆感想叢書） 1939（昭和14）年9月 金星社 \*

### 甲府 疎開の頃

写真 甲府の歩兵第49連隊兵営にて 1944（昭和19）年5月  
井伏鱒二「げにわがために吾がためにわれは貧しくひとり咲く」軸装 \*  
井伏鱒二「さびしい庭にまつかさおちてとてもおまへはねにくうござろ」色紙額 \*  
井伏鱒二「甲府盆地をのぞむ」水彩画 額装 \*  
写真 甲運亭にて 1976（昭和51）年4月6日  
井伏鱒二 熊王徳平宛葉書 1945（昭和20）年1月15日  
井伏鱒二 岩月くま宛書簡 1945（昭和20）年7月12日 \*

井伏鱒二 岩月くま宛書簡 1945 (昭和20) 年10月7日 \*

井伏鱒二 伴俊彦宛書簡 1946 (昭和21) 年12月29日

井伏鱒二 岩月英男宛葉書 1959 (昭和34) 年12月16日 \*

井伏鱒二 「二つの話」原稿  
「展望」1946 (昭和21) 年4月

井伏鱒二 古明地義勇宛書簡 1973 (昭和48) 年3月16日 \*

山梨県立塩山商業高等学校文芸部誌「扇状地」第14号 1972 (昭和47) 年3月 \*

井伏鱒二 「十一月二十四日記」原稿

井伏鱒二 「蛍の季節」原稿

井伏鱒二 「十一屋の若旦那」原稿

## 境川 交友 蛇笏 龍太

井伏鱒二 「わたしの心の大空に舞ひくるふはるかなる紙凧一つ」額装 \*

写真 飯田蛇笏の葬儀告別式の日 1962 (昭和37) 年10月6日

写真 蛇笏の三回忌法要に出席した後、飯田家後山のあずま屋「狐亭」にて 1964 (昭和39) 年10月4日

井伏鱒二 「蛇笏忌をわが歳事記に入れにけり」色紙 額装 飯田龍太旧蔵 \* 【前期展示】

井伏鱒二 「蛇笏忌をわが歳事記に入れにけり」色紙 額装 小林富司夫旧蔵 \* 【後期展示】

写真 境川村坊ヶ峰頂上にて 1967 (昭和42) 年4月8日 撮影 名取晃

井伏鱒二 「あの山は誰の山だ どつしりとしたあの山は」軸装

井伏鱒二 飯田龍太宛葉書 1957 (昭和32) 年3月11日消印 \*

井伏鱒二 「今月今日記－俳句と女史のアルバイト船」原稿  
「雲母」500号記念号 1959 (昭和34) 年1月

井伏鱒二 飯田龍太宛葉書 1959 (昭和34) 年3月27日 \* 前期

井伏鱒二 飯田龍太宛書簡 1959 (昭和34) 年5月29日 \* 後期  
「俳句」1962 (昭和37) 年12月 追悼特集飯田蛇笏

井伏鱒二 「蛇笏碑のこと」原稿  
「雲母」1963 (昭和38) 年11月

井伏鱒二 「あいさつ」原稿  
「雲母」1967 (昭和42) 年6月

井伏鱒二 『小黑坂の猪』1974 (昭和49) 年7月 筑摩書房

井伏鱒二 「蜜柑の木」原稿  
「雲母」1977 (昭和52) 年4月

## 幸富講

井伏鱒二 「幸富講境川に来る裏で釣る部屋で飲むそれで良い」軸装  
飯田龍太宛 井伏鱒二ほか幸富講寄せ書き 額装

飯田龍太 井伏鱒二宛書簡 1970 (昭和45) 年3月12日

飯田龍太 井伏鱒二宛書簡 1971 (昭和46) 年3月2日

井伏鱒二 飯田龍太宛書簡 1969 (昭和44) 年2月15日 \*

井伏鱒二 飯田龍太宛書簡 1978 (昭和53) 年11月24日 \*  
釣り竿「わすれね」

## 下部温泉

写真 栃代川にて 1963 (昭和38) 年4月16日 撮影 小林富司夫

井伏鱒二 「九月二十日記」原稿

おんやど帖 \*

井伏鱒二 野沢純宛葉書 1955 (昭和30) 年2月13日消印 \*

井伏鱒二 飯田龍太宛書簡 1963 (昭和38) 年4月21日 \*

写真 栃代川の釣行で、飯田龍太と 1963 (昭和38) 年4月16日 撮影 小林富司夫

写真 下部温泉の理髪店「やまめ床」(井伏鱒二命名)にて 1967 (昭和42) 年 撮影 中央公論新社写真部

井伏鱒二 飯田龍太宛書簡 1966（昭和41）年5月30日 ＊  
井伏鱒二 「飯田龍太の釣」原稿  
井伏鱒二 依田喜史宛年賀状 1979（昭和54）年・1981（昭和56）年 ＊  
井伏鱒二 依田啓史宛年賀状 1989（平成元）年・1992（平成4）年 ＊  
井伏鱒二 「その泉の深さは極まるがわき出る水は極まり知れぬ」軸装 ＊  
「中央公論」1966（昭和41）年8月  
井伏鱒二 源泉館 石部尚宛書簡 1984（昭和59）年11月23日 ＊  
井伏鱒二 「川で会った人たち」原稿  
井伏鱒二 筆「富士川流域の絵地図」  
写真 取材のため下部温泉を訪れた井伏 1966（昭和41）年5月  
写真 下部町上の平の不二ホテルに建てられた「三田村鳶魚終焉之地」記念碑除幕式にて  
1968（昭和43）年5月14日  
井伏鱒二 三田村玄龍（鳶魚）宛書簡 年不明3月20日 ＊  
井伏鱒二 野沢純宛書簡 1952（昭和27）年5月16日消印 ＊  
寄せ書き帖「捧 玄龍大居士」 ＊  
井伏鱒二、小林富司夫ほか 寄せ書き ＊

## 富士北麓

写真 河口湖にて 1953（昭和28）年  
井伏鱒二 「若彦路」原稿  
「別冊 文藝春秋」1956（昭和31）年12月  
井伏鱒二 飯田龍太宛葉書 1957（昭和32）年8月5日消印 ＊  
井伏鱒二 『七つの街道』1957（昭和32）年11月 文藝春秋新社  
井伏鱒二 「恐くて好きな富士山」原稿  
井伏鱒二 「船津村の窯趾」原稿  
「海」1976（昭和51）年1月  
井伏鱒二 飯田龍太宛書簡 1976（昭和51）年4月11日消印 ＊  
井伏鱒二 『岳麓点描』1986（昭和61）年4月 弥生書房

## 清春芸術村

写真 安岡章太郎と  
写真 三浦哲郎と  
井伏鱒二 野上照代宛書簡 1987（昭和62）年3月1日消印  
「清春」第19号 1994（平成6）年4月  
井伏鱒二 飯田龍太宛書簡 1970（昭和45）年7月3日 ＊ 前期  
井伏鱒二 飯田龍太宛書簡 1972（昭和47）年7月30日 ＊ 後期  
井伏鱒二 飯田龍太宛書簡 1988（昭和63）年2月11日消印 ＊

## 愛用品

井伏鱒二の愛用した魚籠・釣り竿・餌入れ  
井伏鱒二 絵付け皿  
井伏鱒二筆 碗「山はまねく 川は招く」 ＊

## 山梨ゆかりの作品

井伏鱒二 「とぼけた湯治場 要害温泉と下部温泉」原稿 ＊  
井伏鱒二 「旧・笛吹川の趾地」原稿  
井伏鱒二 「大月の岩殿山」原稿  
井伏鱒二 「甲斐の黒駒」草稿  
井伏鱒二 「甲州北巨摩の大武川」草稿



交友 深沢七郎

深沢七郎 井伏鱒二宛書簡 1968 (昭和43) 年3月10日

深沢七郎 井伏鱒二宛書簡 1968 (昭和43) 年9月9日

深沢七郎から贈られた愛用の小引き出しと将棋駒台

特設展 生誕120年

# 井伏鱒二展

旅好き 釣り好き 温泉好き



Illustrated by Sashiko Fujiwara

2018年4月28日(土)→6月17日(日)

作家・井伏鱒二が山梨に残した足跡と作品をたどります。

〔休館日〕月曜日(4月30日は開館) 〔観覧料〕常設展チケットでご覧いただけます。  
一般320円(260円) 大学生210円(170円)

\*1) 14歳20歳以上の観覧料は、県内観覧券割引対象。  
\* 高校生以下の児童・生徒、65歳以上の方、障害者手帳をご持参の方、およびその介護をされる方は無料。

山梨県立文学館  
Yamanashi Prefectural Museum of Literature



## ② 特設展「童話の花束 子どもたちへの贈り物」

期 間 平成30年7月14日（土）～8月26日（日） 39日間

趣 旨 芥川龍之介、前田晁、徳永寿美子、村岡花子ら山梨出身・ゆかりの文学者の児童文学作品を紹介する展覧会。  
芥川龍之介は「赤い鳥」創刊号（1918年7月）に「蜘蛛の糸」を発表以降、同誌に計5編の童話を寄せている。歿後には生前から出版が計画されていた童話集『三つの宝』が刊行された。  
前田晁は、童話の創作や翻案のほか歴史読物として『少年国史物語』を刊行。また、村岡花子の初めての翻訳本『王子と乞食』の完成を見守り、宇野浩二から「揺籃の唄の思ひ出」の改稿原稿を送られるなど、多くの作品の出版に携わった。妻の徳永寿美子は晁と結婚後、童話創作を始め、母親がわが子に話を語り聞かせることの大切さを説いた。  
このほか、アンデルセンの童話を翻訳した本県出身の矢崎源九郎、疎開をきっかけに山梨に移住し、「マスの大旅行」「山ぼとクル」など、精緻な自然観察を基に独自の動物読物を執筆した太田黒克彦らの作品を、原稿や書簡、図書、雑誌など約60点の資料で紹介する。

## 展 示 資 料 一 覧

### 芥川龍之介

「赤い鳥」創刊号 1918（大正7）年7月  
芥川龍之介「蜘蛛の糸」原稿（複製）原本 神奈川近代文学館蔵  
芥川龍之介「杜子春」原稿（複製）原本 天理大学附属天理図書館蔵  
「赤い鳥」第5巻第1号 1920（大正9）年7月  
芥川龍之介「アグニの神」草稿  
「赤い鳥」第6巻第1号・第2号 1921（大正10）年1月・2月  
芥川龍之介 鈴木三重吉宛の手紙 1919（大正8）年11月9日  
「赤い鳥」第4巻第1号 1920（大正9）年1月  
芥川龍之介 草稿（タイトルなし）  
芥川龍之介『三つの宝』1928（昭和3）年6月 改造社

### 村岡花子

安中花子『爐邊』1917（大正6）年12月 日本基督教興文協会  
村岡花子『島の娘』1924（大正13）年11月 あをぞら社  
村岡花子『道雄を中にして』1926（大正15）年12月 非売品 寄託資料  
「家庭」第2巻第11・12号 1931（昭和6）年12月 寄託資料  
村岡花子 前田晁宛のはがき 1926（大正15）年10月22日  
村岡花子 前田晁宛の手紙 1926（大正15）年（推定）12月21日  
村岡花子 前田晁宛の手紙 1927（昭和2）年1月6日  
村岡花子「赤毛のアン」翻訳原稿 第3・4・5章 寄託資料  
ルーシー・モード・モンゴメリ 作 村岡花子 訳『赤毛のアン』1952（昭和27）年5月 三笠書房  
村岡花子『童話集 桃色のたまご』1935（昭和10）年11月 健文社  
村岡花子『青イクツ』学年別・新選童話集一年生 1940（昭和15）年8月 新潮社  
村岡花子『たんぼぼの目』1943（昭和18）年6月再版 1941年12月初版 鶴書房  
村岡花子『童話集一年生』1939（昭和14）年4月 童話春秋社  
村岡花子『童話集二年生』1941（昭和16）年6月4版 1940年4月初版 童話春秋社  
村岡花子『新しい童話 一年生』1935（昭和10）年9月4版 1934年8月初版 金の星社  
村岡花子『特選童話 一年生』1937（昭和12）年6月 金の星社  
ポーター 作 村岡花子 訳『喜びの本』1939（昭和14）年12月 中央公論社  
ルイザ・メイ・オルコット 作 村岡花子 訳『薔薇の少女』1948（昭和23）年9月 新少國民社  
ジャッドソン 作 村岡花子 訳『ジェーン・アダムスの生涯』1953（昭和28）年4月 岩波書店  
村岡花子『日本イソップ絵物語』1933（昭和8）年3月 大日本雄弁会講談社  
村岡花子 文 三谷一馬 絵『鉢かずき姫』1952（昭和27）年11月 日本書房

日本児童教育図書協会 編『児童新文学読本 三・四年生用』1950（昭和25）年11月 愛児出版社  
『放送童話 三年生』1955（昭和30）年7月 金の星社  
『放送童話 五年生』1956（昭和31）年8月 金の星社

## 中村星湖

中村星湖「とほい呼鈴」原稿  
「赤い鳥」第6巻第3号 1924（大正13）年12月・1919年11月  
「赤い鳥」第9巻第3号 1915（大正11）年9月  
「赤い鳥」第13巻第6号・第17巻第5号 1924（大正13）年12月・1926年11月

## 前田晁

前田晁『銀の翼』1924（大正13）年11月 金星堂児童部  
前田晁『童話集 森の鼻』1925（大正14）年2月 第一出版協会  
前田晁『新選童話三年生』1940（昭和15）年3月 童話春秋社  
前田晁『かなづちの歌』1947（昭和22）年12月 雁書房  
前田晁『青い目のかに』1954（昭和29）年1月 同和春秋社  
坪田譲治・壺井栄・徳永寿美子・前田晁・村岡花子編集『二年生の少女童話』1955（昭和30）年1月 金の星社  
前田晁『少年国史物語』1933（昭和8）年～1936年 豪華版 全6巻 早稲田大学出版部  
前田晁『少年国史物語』1937年 全6巻 普及版 早稲田大学出版部  
前田晁『少年国史物語』1940年 全7巻 増補改訂版 早稲田大学出版部  
前田晁『少年国史物語』1956年～1960年 全7巻 金の星社  
前田晁『少年国史物語』内容見本 早稲田大学出版部  
前田晁「みにくいあひるの子」原稿  
宇野浩二 前田晁宛の手紙 1930（昭和5）年8月23日  
宇野浩二 前田晁宛の手紙 1930（昭和5）年10月1日  
童話作家協会 編『日本童話選集』第6輯 1931（昭和6）年11月 丸善株式会社  
童話作家協会臨時総会記念写真 1939（昭和14）年11月18日  
アミーチス 作 前田晁 訳『クオレ』1927（昭和2）年1月 平凡社  
アミーチス 作 前田晁 訳『クオレ』上・下 1955（昭和30）年6月2刷・9月 岩波書店  
アミーチス 作 前田晁 訳『クオレ』上・下 1975（昭和50）年11月24刷・5月21刷 岩波書店  
アンリ・ファーブル 作 前田晁 訳『科学物語』第1～4巻 1955（昭和30）年8月 福村書店  
ヘンドリックヴァン・ルーン 作 前田晁 訳『聖書物語』1931（昭和6）年12月 東京堂

## 徳永寿美子

徳永寿美子『童話集 赤い自働車』1923（大正12）年12月 金星堂  
長尾七郎 編『児童修身 美しいお話 尋常3学年』1931（昭和6）年3月改訂3版 創元社  
徳永寿美子『お母さんのお話（2）エンピツ ノ サウダン』1935（昭和10）年1月 金の星社  
徳永寿美子「雲をながめる」草稿  
徳永寿美子『小学生童話 雲をながめる』1939（昭和14）年6月 童話春秋社  
徳永寿美子『新選童話二年生』1940（昭和15）年3月 童話春秋社  
徳永寿美子『おかあさんのおひざ 母と子の童話教室』1954（昭和29）年6月3版 三十書房  
徳永寿美子「童話とともに四十（よそ）とせをへにけりただひとすじに」色紙  
徳永寿美子 執筆の予定を記したメモ  
徳永寿美子『大将のお馬』1942（昭和17）年9月再版 1941年8月初版 金の星社  
バーネット 作 徳永寿美子 訳『小公子』原稿  
徳永寿美子 文 杉全直 絵『小公子』1951（昭和26）年4月 小峰書店  
バーネット 作 徳永寿美子 訳『小公子』1956（昭和31）年1月 偕成社  
徳永寿美子「新春の誓い」1963（昭和38）年1月3日  
徳永寿美子「ウサちゃんのおつかい」草稿  
徳永寿美子『うさぎの せんたくや』1965（昭和40）年12月 盛光社  
徳永寿美子『フランダーズの犬』1966（昭和41）年10月 金の星社



徳永寿美子『うさぎのたねまき』1950（昭和25）年1月 むさし書房

徳永寿美子『ひらがな童話名作選 ぴよぴよちゃん と びいびいちゃん』1952（昭和27）年1月 小峰書店

## 矢崎源九郎

矢崎源九郎 小林富司夫宛のはがき 1951（昭和26）年6月2日消印

矢崎源九郎 小林富司夫宛の手紙 1954（昭和29）年5月29日

矢崎源九郎 小林富司夫宛のはがき 1955（昭和30）年6月13日消印

矢崎源九郎 訳『アンデルセン童話全集』第2巻・第4巻 1954（昭和29）年2月・4月 河出書房

## 太田黒克彦

太田黒克彦『小ぶな物語』草稿

太田黒克彦『小ぶな物語』1947（昭和22）年9月 大日本雄弁交會講談社  
昭和21年度第5回 野間文芸奨励賞メダル

太田黒克彦『マスの大旅行』草稿

太田黒克彦『マスの大旅行』1956（昭和31）年9月 大日本雄弁交會講談社

太田黒克彦『ひなどりの朝』1948（昭和23）年9月 好江書房

太田黒克彦「流された紅子」草稿

太田黒克彦『しんじゅの家』1959（昭和34）年5月 講談社

太田黒克彦『山ぼとクル』1962（昭和37）年5月 講談社

太田黒克彦 竹村坦宛のはがき 1941（昭和16）年4月29日

太田黒克彦『いななけ愛馬』1941（昭和16）年5月 竹村書房

太田黒克彦 竹村坦宛のはがき 1941（昭和16）年8月31日

太田黒克彦『川魚ものがたり』1941（昭和16）年8月 竹村書房

太田黒克彦「山の草ぶえ」草稿

「子どもの光」4月号 1958（昭和33）年4月

## 小野政方

小野政方「天神森のこども」原稿

小野政方『白い小兎』1924（大正13）年4月 研究社

エ・ダブリュ・ホール 著 小野政方 訳『二人イソルデ姫』1930（昭和5）年6月 平凡社

小野政方『りんごののぞみ』1928（昭和3）年10月 研究社

童話作家協会 編『日本童話選集』第2巻 1931（昭和6）年10月4版 丸善株式会社

小野政方『愛児童話 つぼみのゆめ』1935（昭和10）年6月 健文社

小野政方『公園のあさ』1941（昭和16）年9月 文昭社

小野政方『青い海の子』1941（昭和16）年11月 玉川学園出版部

小野政方『随筆紀行甲斐風土』1942（昭和17）年12月 鶴書房

特設展  
 どう わ は な た ば

# 童話の花束

子どもたちへの贈り物

芥川龍之介、前田晁、徳永寿美子、村岡花子ほか山梨ゆかりの文学者の児童文学作品を紹介します。



芥川龍之介



村岡花子



徳永寿美子



前田晁

2018年  
 7月14日[土]—  
 8月26日[日]



〒401-8511 山梨県甲府市1-27-8 2F 山梨県立文学館  
 山梨県立文学館の運営は山梨県立文化センターが担当しています。  
 ©山梨県立文学館の発行は1954年7月 山梨県立文学館 発行 山梨県立文学館  
 山梨県立文学館 〒401-8511 山梨県甲府市1-27-8 2F 山梨県立文学館



山梨県立文学館  
 Yamanashi Prefectural Museum of Literature



### ③開館30周年記念 新収蔵品展 手書きのリズム

与謝野晶子・芥川龍之介・飯田蛇笏・中村星湖・津田青楓・武田泰淳ほか

期 間 平成31年1月26日（土）～3月24日（日）50日間

趣 旨 作家の手書きの原稿や手紙には、文字の強弱や書かれた速度など、独特のリズムがある。本展では、与謝野晶子・飯田蛇笏・中村星湖・津田青楓の書、芥川龍之介・武田泰淳の原稿など、2018年に当館で新たに収蔵した資料を中心に、約80点の資料により、手書きの文字から様々な作家の個性を楽しんでいただく。同時に、寄贈・寄託・購入による資料収集の成果を広く周知し、収蔵後の初公開の場として文学資料の魅力を紹介していく。

#### 展 示 資 料 一 覧

##### 晩年の芥川龍之介と「浅草公園－或シナリオ－」

芥川龍之介「浅草公園－或シナリオ－」原稿

写真 新潟高校にて。1927（昭和2）年5月24日 提供 日本近代文学館

写真 改造社の円本全集の宣伝用フィルムより。長男・比呂志、次男・多加志と。1927（昭和2）年 提供 日本近代文学館

##### 中村星湖 妻を悼む詩

写真 中村星湖の家族と石橋湛山夫妻 1959（昭和34）年8月20日

中村星湖「山荘八景」襖

##### 与謝野晶子と萬屋醸造店

与謝野寛「禁断の果ハ採らず高きに八住まねど早く遂はれつる人」

与謝野晶子「昨日の栄華の屑の身なりとも思ひなさましきびしきに過ぐ」軸装 寄託資料 萬屋醸造店蔵

与謝野寛「抱くとて父も濡れけり末の子が雪を浴びこし髪のしづくに」軸装 寄託資料 萬屋醸造店蔵

与謝野晶子「法隆寺など行く如し甲斐の御酒春鶯囀のかもさるゝ蔵」軸装 寄託資料 萬屋醸造店蔵

与謝野晶子「わが友の増穂の村の夜の草に車のふれてなつかしきかな」軸装 寄託資料 萬屋醸造店蔵

与謝野晶子 百首屏風 寄託資料 萬屋醸造店蔵

与謝野寛 中込旻宛書簡 1933（昭和8）年10月9日 寄託資料 萬屋醸造店蔵

与謝野寛 中込旻宛書簡 1933（昭和8）年10月11日 寄託資料 萬屋醸造店蔵

与謝野寛 中込旻宛書簡 1933（昭和8）年10月25日 寄託資料 萬屋醸造店蔵

与謝野晶子「源氏物語礼讃」卷子 寄託資料 萬屋醸造店蔵

与謝野寛「戸あくれば溪間の秋の星冴えて飛ぶ雲早し金峯おろしに」色紙 寄託資料 萬屋醸造店蔵

与謝野晶子「自在観善海坊が調じたるじねんじょのごと朝の波立つ」短冊 寄託資料 萬屋醸造店蔵

与謝野晶子「連山がいく重の円を描く中の甲斐の国府のながき町かな」寄託資料 萬屋醸造店蔵

与謝野晶子「水わたる風なつかしくほろにがし甲斐の深山の暁にして」短冊 寄託資料 萬屋醸造店蔵

写真 勝沼の第一葡萄園にて 1933（昭和8）年10月21日

写真 甲府市にある昇仙峽の主峰・覚円峰を背にした寛と晶子 1933（昭和8）年10月21日 提供 萬屋醸造店

写真 中込家の応接間で 提供 萬屋醸造店

##### 高浜虚子と柏木白雨

新蕎麦会 高浜虚子 選句稿 軸装 1942（昭和17）年8月22日

新蕎麦会 山中虚子山荘句会 投句稿 軸装 1951（昭和26）年月1日

写真 南都留郡山中湖村平野に立つ虚子山荘

写真 第1回新蕎麦会の日 1940（昭和15）年9月

##### 佐佐木信綱 金櫻神社の歌碑

佐佐木幸綱 筆 佐佐木信綱「鳥の聲水のひびきに夜はあけて神代ににたり山中の村」軸装

佐佐木幸綱「ゆく水のしぶき渦巻き裂けてなる一本川お前を抱く」軸装